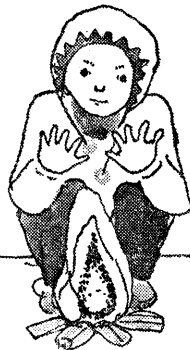


自然とのふれあい (その3)

秋のみおり

斉藤 芳子



お店ごっこをする前に、町の商店街を見学
に園児たちと出かけました。

豊かな実りの秋を迎え、八百屋、果物屋の
店先は、色とりどりに美しく果物や野菜が並
べられています。

赤、青、黄色のりんごのいろいろ、大きい
みかん、小さいみかん、つややかな柿の色、

ごぼう、人蔘、とろろいもなどの長い根の土
の中の実りなど、長さくらべの様にならべら
れた八百屋などを見て、「きんぴらやとろろ
ご飯をつくるのよ」と先生の話をかいてびっ
くりしています。

木の実り、畑の実り、土の中の実りなど、
いろいろな品物をじっくり見て、「食べたい

なア」「これなんだろう」などにぎやかな話し声ははずみずみ。

幼稚園に帰ってから、粘土で作るもの、折紙で作るもの、絵を描くもの、それぞれもおもいのお店やさんになって、商品製作をはじめていきます。

「先生、絵見てちょうだい。私かいたの」お店にあった果物が、木になっているのを描いています。

ぶどう棚のような畑の棚に、ぶどうの房のように、茶色い実がぶらさがっています。

「これなにがなっているの？」

「それね おいもなの」

さつまいも棚にいっぱいぶら下がっている「さつまいも」の絵を描いて、満足気にここにこくと答えています。

考えてみれば、子どものうち何人が、土の

中の実りを見ているだろうか？ 否、地上の木の実りさえ、畑の実りさえ、実際に見知っている子は何人いるだろう？ と考えた時、今まで子どもに話していること、教えてきたことが、「知っているもの」とした大人の概念からなされていたり、稲一本を見せて広い田んぼの話をしたりしてきたことが、果たして十分子どもに理解されていただろうか？ と急に反省され心配になって来ました。

幼児の教育はもっと具体的で、体験的でないければならないとつくづく考えました。

そして三六年頃から二キロ程はなれたところにある農場に「さつまいも掘」の遠足にゆくことにし、途中、田んぼや、畑、柿の木など秋の実りの見られる裏道を歩いて、車の通る道はさけるようにしました。

年少を先頭に年長を後に、全園児でゆっくりゆっくり歩きながら、広々とした田んぼの刈り入れを見たり、道端に飛び出すいなごを取ったりして列を飛び出してゆきます。

「いなごは食べられるのよ、戦争中はお魚もお肉もなくて、食べ物も十分食べられなかったから、栄養不足で、子どもは丈夫に大きくなれないので、小学生も皆でいなご取りをして、羽根と足を取ってつくだににして、おべんとうのおかずにしたのよ」

「かわいそう」

「気もち悪い」

「でもいなごはお百姓さんが一所懸命つくっている稲をどんだん食べる害虫だから、お米がすくなくなると心配して、大人も子どももお手伝いして取ったのよ」

「そうか、悪い虫なら仕方ないね」

休憩しながらお話を聞き、取り残された「か

かし」を見て、雀やからすなどの害鳥の話もききました。

青空に映える真赤な柿を見上げながら、またあるけあるけの観察です。下を見れば、畑に大根、人蔘、茄子、白菜などの葉が見えます。

「先生 あそこにも柿が見える」

「あれッ 袋かぶせたの何」と梨棚を見て、質問をする子もいます。

次々と珍しい田園風景に、お店とちがう秋の実り、珍しい実際を見て、大声を出してガヤガヤワイワイはしゃいでいます。

四〇分位で一人の落伍者もなく、二キロの道を歩いて農場へ到着しました。

牧草の広場に坐って、全員の到着を待ち、先生の案内で畜舎、鶏舎、果樹畑、野菜畑などを見て廻ります。

ジャージの乳牛の前では、地につかンバカ

りに大きく張った乳房を見て

「先生 牛のおっぱい大きいね」

「お乳四つもあるの、飲みたいなア」

など、お話が絶えません。

豚小屋の前では、大きな母豚が横になって十二匹の可愛い仔豚にお乳を飲ませているのを見ながら、仔豚の数と、乳房の数をかぞえている子もいます。

クローバーの原につながれて野草の実りを食べている山羊を追って、注意されている子もいます。

鶏舎の中で、産卵箱の中のたまたま産みだての卵を手にとった女の子が、

「あつ先生、この卵暖かい、ゆで卵生んだ」と大喜びをしています。

サイロの側で、冬雪が降って、秋の実りも牧草もサイロいっぱい、牧草やとうもろこ

しや牛などの食物を干して、蓄えて、冬の間食べていることをお話しします。

果樹畑にゆき、根元に落ちた固いくるみの実や、栗いがの皮をむきながら、

「栗 二つ入っていた、三つもある」などと大声をあげて告げています。

梨棚の下に立って、袋かけしたままの梨をそつと握って「大きいのが入っている」とつぶやいているので、袋を破って見せてやると、満足そうに、皆でにこにこしています。

野菜畑では、土の中の実りをたずねて、葉っぱをおぼえ、大根、人蔘、玉葱などを一本宛抜かせてもらいました。

一巡してから、草原に腰を下し、お弁当にします。

「お米、お野菜、果物と、

秋はうれしい、実り時。

実りの秋の楽しさを、

感謝しましょう うたいましょう」

何時もより心をこめて、力いっぱい歌っているように聞こえます。

食事の休憩の終わったころ一人一人持参の移植ペラを手に手に持って「さつまいも畑」に入ります。さつまいもの自然のままの实り方を、畑の様子から知らせたいので、いもづるも茎もそのままなので、畑に入るのから大変です。

つる返しをして入る道をさがし、うねが見つかると、砂あそびのように、あちこちの土を握りまわして「おいも」をさがします。

いもづるの茎の下の土の中にしか「おいも」は実らないことを話します。と、やがて土の中から、薄桃色のおいもが見えてきて、

あちこちから歓声が聞こえてきます。

二メートル程あるいもづるを、綱引のように四、五人で、よいしょよいしょとうねから引きはなしている子、茎の下を二、三人で固い土を力いっぱい掘り起して、さつまいもを掘り起している子、とにかく力いっぱい一所懸命です。赤くなったてのひらの豆を見せにくる子もいます。

長いいもづるを比較してびっくりしたり、大きいおいも、小さいおいもを見せ合ったり、大きいおいもは一つるに三個位、小さいおいもは一つるに七個位実っていることを発見しました。

掘ったおいもは、畑のそばの広っぱに次々持って来て、見る見る積み重なるおいもの山にますます張り切っています。

惜しそうに自分の掘ったおいもを撫でまわして土を払いそっと置いていく子、走って来

て「僕の掘ったおいもどれ？ この一番大きいのだね」と見に来る子もいます。

帰りには、大きいおいもと小さいおいもを組合せて、少しずつランドセルに入れさせます。「お家のお土産にして、天ぷらや、お汁にして食べてね」と話します。

残ったおいもはダンボール箱に入れて幼稚園に持ち帰り、翌日ふかして、牛乳のおやつに皆で楽しく味わいます。

翌日の保育はもっぱら「いも掘遠足」の新しい発見や経験の話題で、先生が発言の整理に困る程です。

食べられない小粒のピンクのいもは足をつけて仔豚になり、またいも判をつくって、スタンプ遊びに興じたりしています。

いもづるの茎と葉っぱで、ペンダントやバ

ルトを作って身体につけ遊んでいます。

持ち帰った自然物を教材に一日楽しんでました。

絵も観察したいろいろの秋の実りの絵が多く、もはや木の枝にぶらさがったおいもの絵もなく、畑のうねの上に緑のいもづるが描かれ、土の中に桃色のおいもが茎の根に連なって実っている絵がたくさん描かれていました。

四十年近く休むことなく、今でも続けている秋の実りの自然とふれあいながらの歩け歩きの遠足ですが、往復四キロ歩く頑張りと自然の中の一日の経験が、行事の中で一番忘れられない楽しさとして残っているようです。社会が文化的になるほど、交通が便利になる程、子どものために続けたい行事です。

(宮城県・聖光幼稚園)